HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	90年史余話 : Another story of the Mysterious Stranger
Author(s)	藤田, 博美
Citation	北大医学部同窓会新聞, 139, 8-9
Issue Date	2011-06-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86352
Type	journal article
File Information	newspaper_139_p8.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

90年史余話
Another story of the Mysterious Stranger

藤田　博美（会員2）

マーク・トウエイン晩年の作品にthe Mysterious Strangerがある。邦題は「不思議な少年」。が、本稿の主人公は少年ではなく、成人。衛生学初代教授の毛利（中島）高一先生のことである。

98年9月1日付けで衛生学講座に着任した。その折、齋藤健助教授（現保健科学研究院教授）から「初代の毛利（中島）高一先生については良く判っていない」という話を引き継いだ。98年3月刊の衛生学教室同窓会誌「齋藤和雄教授退官記念号」の42～51ページには神山昭男先生の著名で「衛生学講座開設過程と初代教授毛利高一先生のこと」と題し、92年1月から4月にかけ齋藤和雄先生のご支援のもと、齋藤健さんとともに学内、母校の東大、故郷の山口にわたって毛利先生の足跡を訪ねた経緯が報告されている。

この報告のお陰で、毛利（中島）先生の1891年6月7日生、1918年東大卒、22年10月7日北大医学部助教授就任、23年10月10日英独への留学のため札幌から出発、25年12月18日帰学、26年1月11日教授昇任、27年5月31日休職、28年4月17日退職、75年9月15日山口にてご逝去というご生涯の概略、26年4月20日に北大より授与された博士号の主論文・参考論文別冊の表紙、山口に隠棲された後の逸話、晩年の後ろ姿が移ったスナップなどを知ることができる。が、そこまでである。

90周年記念の写真集のレイアウトにあたって、肖像写真すら伝わっていない毛利先生をどう扱えば良いのか、担当者として実に困った。2009年夏、たまたま法医学の寺沢教授に「余りに早く辞められたので、写真一枚伝わってないんだよねえ」とボヤいた。すると「あ、それなら同窓会の方で何とかなるかも判らない。あてにしないで待ってて」とのご返事。数日後、寺沢先生が「ほらここにあった」、医学部一期生の卒業記念アルバムに『衛生学中島高一教授帰朝記念』と題された集合写真があること（図1）を教えて戴いた。拝借したアルバムの写真から毛利（中島）先生の肖像写真を作製し、90周年の写真集（139ページ）に掲載すると同時に、歴代教授の額に並べることができた。寺沢教授のお陰で、衛生学の流れを受けた一後輩としてのささやかな努めの一つを果たせたような気がする。

図2

後日、1927年刊の写真帖『北海道帝国大学創基五十周年記念写真』に毛利先生の肖像写真が載っており、それが北方資料室に所蔵されていることも突き止めた。寺沢先生を通して北大↙

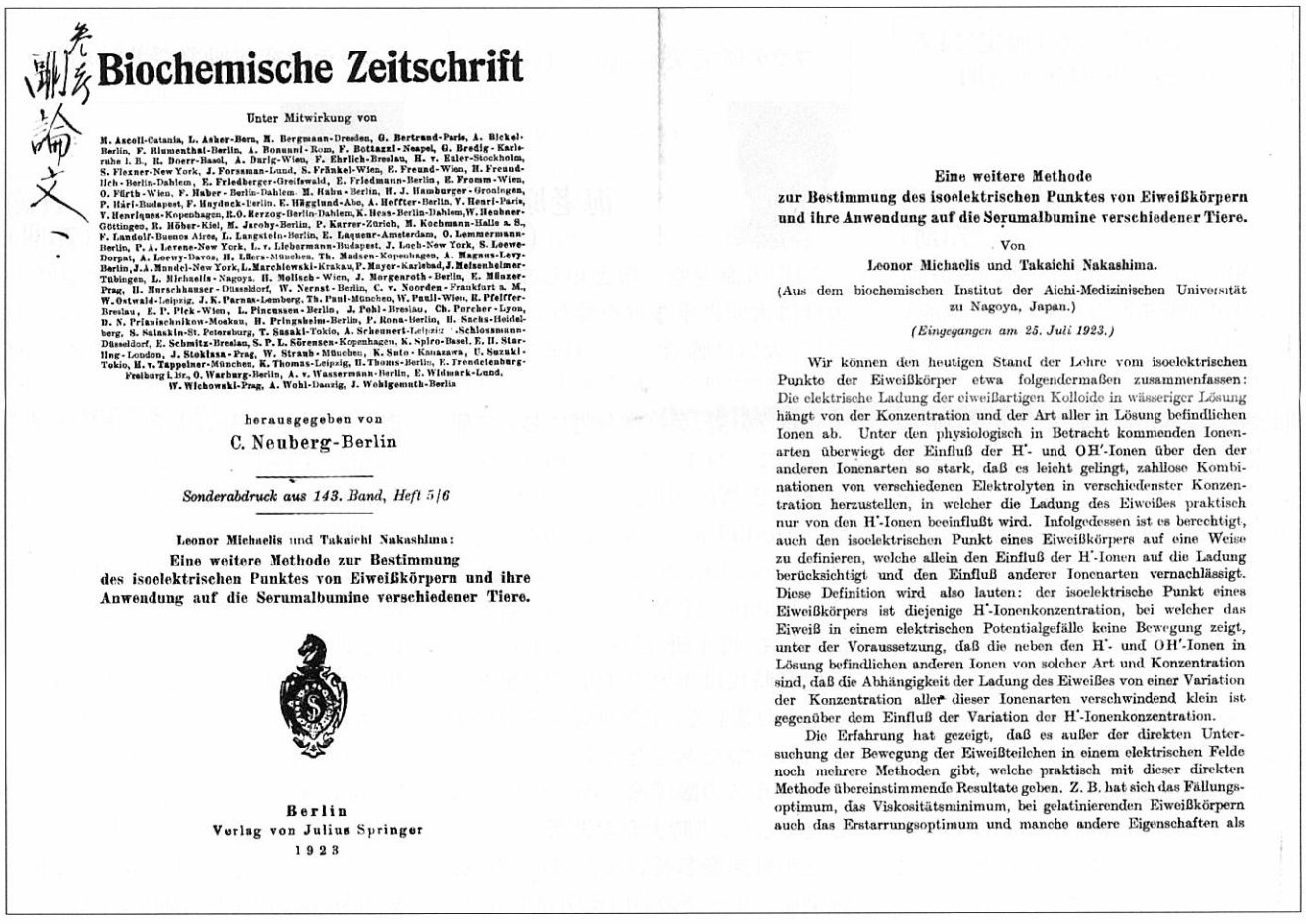

図3

↘大学文書館の山本美穂子さんに肖像写真について問い合わせて戴いたところ、同文書館所蔵の写真帖から映像の提供を受けることが出来た（図2）。

さて、神山先生の前掲報告にあるように、北大図書館には毛利先生の学位主論文1編（ドイツ語、単著）と参考論文3編（ドイツ語共著1編、日本語共著2編）の別冊が所蔵されている。Biochemische Zeitschrift誌（1967年よりEur J Biochem, 現在はFEBS Jと改称）に掲載されたEine weitere Methode zur Bestimmung des isoelektrischen Punktes von Eiweisskoerpern und ihre Anwendung auf die Serumalbumine verschiedener Tiere. と題された参考論文（図3）の著者はLeonor Michaelis und Takaichi Nakashima となっている（90周年写真集139ページ）。待てよ、これって酵素反応速度論のミハエリス・メンテンの式を作ったミハエリス先生じゃなかろうか、と疑問を持った。同論文のLeonor Michaelisの所属はaus den biochemischen Institute der Aichi-Medizinischen Universitaet zu Nagoya, Japan となっている。そういえば、ミハエリス先生が名古屋にいたことがあるという文章を読んだ記憶がある。人事記録は、県立愛知医大の後身、名大医学部の事務に残ってるハズ、と電話した。当惑した返事が返ってきた「大正時代の人事記録は処分されました」。

困った。が、事務がダメなら教室に問い合わせてみよう。ネットで県立愛知医大生化学の現在の名称を調べ↙

図1

↘てみた（重点化以来、各大学てんでバラバラに研究室の名前を変えたので、こういう時は困る、人ごとではないけれど）。生物化学講座分子生物学分野というらしい。教授は門松健治先生82年九大医学部卒となっている。この学年どこかで聞いた覚えがある。ロックフェラー時代の仲間・住本英樹君のHPに入ってみる。ビンゴ！同級生。考えてみれば名大総長の濱口道成君もロックフェラー仲間だ。

一面識もない門松先生に「つかぬことを‥」とメールを出す。住本君とはNY仲間、従って濱口君ともダチ～～との自己紹介で「ウチの初代教授と共同研究したミハエリス先生に関する情報があればご教示下さい」と。直ぐにご返事が来た。「嬉しいご連絡を頂きありがとうございます。確かにレオノール・ミハエリス教授は私どもの教

図4

室の教授でありました。1922.10.30－1926.3.31の間在職され、米国へ移られたと聞いております。添付は学生の講義のときに私がよく使うスライドです。写真は曾孫さんが2年ほど前に来られたときにいただいたコピーです。奥様と2人のお嬢様もご一緒です(図4)。教室史の一部も保存しております」と。

共著論文にはEingegangen am 25 Juli 1923 と記されている。23年7月25日受理となる。時系列にするとこういうことになる。1922年10月7日毛利(中島)先生北大助教授、同年10月30日ミハエリス先生県立愛知医大教授、同年11月10日北大衛生学教室落成、23年7月25日論文受理。当時の郵便事情(船便しかない)から、論文投函は遅くとも6月初旬。とすれば、この研究はミハエリス先生来日から約半年間の成果ということになる。ほぼ同じ時期に名古屋と札幌で研究室作りを始めたミハエリス先生と毛利先生は、当時の通信・交通事情のもとでどのようにして共同研究を進めたのだろう？Mysteryは残ったままである。

90周年写真集(25ページ)には第一期生(22年4月入学、26年3月卒業)の卒業記念アルバムからミハエリス先生の写真(図5)が転載されている。第一期生のアルバムに掲載された理由は判らない。が、一期生の在籍期間は前掲のミハエリス先生の滞日時期とほぼ重なる。とすれば、何かの折りの札幌来訪が考えられる。もし22年11月から翌年6月の期間の来札であれば、毛利先生との共同研究の打ち合わせも想像される。しかし、さすがにそこまでは名大の研究室にも伝わっていなかった。

図5

ミハエリス先生で検索をかけてみる。「膠質化學概論；生化學の研究、Leonor Michaelis記念號」という書籍が見つかった。北大医化学初代教授の太黒薫先生(在任1921年～33年)の著書である。この書籍は医学図書館に所蔵されている。同書の序文には「北大における Leonor Michaelis教授の講演を太黒薫教授が翻訳したのもの」と説明されている。間違いなくミハエリス先生は札幌を訪問されていた。かつ、添付された肖像写真は一期生のアルバムと全く同じものである。では、来訪は何時か？

本書の刊行は1925年6月となっている。巻頭のLeonor Michaelisと題した評伝では、名古屋を訪れたアイシュタインのバイオリンとピアノで合奏したというエピソードが紹介されている。ミハエリス先生の来日直後、22年12月7日から9日にかけてのことであろう。評伝文末に、ミハエリス先生自身の「私はこれで約二年ほど日本にいることになる」というコトバが記されている。従って、北大訪問は1924年秋以後である。

正確な訪問時期は判らないだろうか？そういえば、大学の近くの太黒胃腸内科病院の創立者が太黒薫先生と聞いたことがある。ご遺族の行方を病院に問い合わせてみた。趣旨をお話しし、問い合わせの書簡をお送りする許可を得た。後日、ご遺族からご連絡があり、同時に旧太黒邸で撮影されたと考えられるお写真を教えて戴いた(図6)。二枚の写真の背景になっている特徴的なデザインのカーテンは太黒夫人＜マダム・マチルド・オオグロ＞がはるばるフランスから持参されたとのことである。ミハエリス先生の札幌来訪は1925年3月3日を挟む日々に確定できたが、残念ながら毛利先生在欧中の出来事であった。毛利先生の帰国(25年12月11日)からミハエリス先生の離日(26年4月1日？)までの3ヶ月余りの期間に、お二人が顔をあわす機会はあったのだろうか？これまたmysteryである。

どのような経緯でミハエリス先生と毛利先生は共同研究を始められたのか？寺沢先生によると『北大医学部50年史』の生化学の項には「太黒先生は欧米に留学しておられた(特にミカエリス教授の処で)」と記載されているそうだ。調べてみると、太黒先生は広島県のご出身、東大卒業は、毛利先生と同期。ご遺族によると、太黒先生は大学卒業の翌年からパスツール研究所に留学、研鑽を積まれたあと、ドイツを経て帰朝されたとのことである。

図6

ならば、50年史記述のようにドイツでベルリン大学にミハエリス先生を訪問され、知己となられた可能性は高い。22年4月に赴任された太黒先生が同年10月に着任した隣県出身の同級生に、来日前後のミハエリス先生を紹介されたとすれば、流れは了解可能である。

26年3月末で県立愛知医大を離れたミハエリス先生が、ジョンズ・ホプキンズ大学を経てロックフェラー研究所で終の研究室を構えたのは、野口英世の研究所葬の一年後、1929年のことであった。英文検索をかけてみる。2006年のIUBMB Lifeの記事、Leonor Michaelis in Japanが上がってきた。1949年に亡くなったミハエリス先生の晩年の論文の一つとして、記事中に1943年のJ Biol Chem誌に掲載されたS Granick and L Michaelis: The characterization of ferritin and apoferritin. が引用されている。なんと、著者の大学院時代の師匠(公衆衛生学)およびロックフェラー大学時代の師匠たち(代謝・薬理学および血液生化学)の共通の師匠(著者にとっての大師匠)、グラニック先生が登場してきた。1938年にミシガン大学から学位を受けたグラニック先生は翌年ミハエリス先生の研究室の一員となっていた。かくて、生化学教科書中の偉人ミハエリス先生は、思いがけずも私の師匠たちの大師匠でもあった。世界は狭い！

なお、本年、太黒薫先生のご遺族のご好意により、同先生およびミハエリス先生関係の資料(写真等)が医学部に御寄贈された。